

# 民報 ゆうばり

# 「子育て世代と考える夕張」シンポジウム開催

# 教育は『自身で考え判断できる主権者を育てる』こと

## 「安倍「教育再生」の ねらいと危険性」の 教育夕張集会開催



9月27日、はまなす会館において夕張・栗山教職員有志の会が主催の「教育夕張集会」が開催されました。約30人が参加しました。

講師の北海道高等学校教職員センター付属教育研究所・相談所事務局長卜部喜雄さんが、地域の教育問題や安倍政権の教育政策改悪について、話しました。

生徒の学習意欲を引き出す授業

英語教師として生徒の学習意欲をいかに引き出せるか、授業に工夫をこらし、英文で日本国憲法を学ぶ授業では、平和憲法の意義を理解し、生徒が真剣になったエピソードを紹介。安倍政権の目指す英語教育は本場の学力ではないことを指摘しました。

また、網走向陽高校長として開校80周年行事の際、形にとらわれず工夫を凝らして、生徒主体の学校行事として内容を構成し、成功させた事例を話しました。

## 「ゆうばりっ子の夢を支えよう！ 子育て世代と考える夕張」 シンポジウム 開催



9月17日、ゆうばり小学校図書室において、「ゆうばりっ子の夢を支えよう！子育て世代と考える夕張」シンポジウムが開催されました。

主催は、ゆうばり再生市民会議、共催はゆうばり小学校PTA、市や教育委員会が後援し、市長や教育長、市議、保護者、一般市民など約50名が参加しました。

第一部は北海学園大学の西村宣彦准教授による、夕張の状況や他市町村との違いと「市民が声をあげなければ何も変わらない」等のお話。

第2部は、パネラーからゆうばり再生市民会議の紹介、夕張の自然や子育てに関するお話。

その後、フロアからもさまざまな意見が出され、「子育て世代と考える夕張のまちづくり」の意見交換の第一歩となりました。

今回、このシンポジウムのコーディネーター役、市内在住の北海道教育大学岩見沢校の能條歩教授は、「子育てには虫や植物、自然にふれあったり、星や夜明けの太陽を見たりする機会、また、周囲の大人たちの温かいまなざしが大切。そういうものが存在する夕張で子育てができてよかったと思う」と、自身の体験を話しながら、若者世代や子育て世代が意見を交流しました。

「小児科と信頼できる入院施設の整備を」「学力が心配」「中学校や高校の進学状況や就職情報がわからない・・・」等、様々な意見が出されました。

## 暴走安倍政権の教育政策

第1次安倍内閣の時に教育基本法が改悪され、「これは憲法が保障する『内心の自由、教育の自由』に反しており、憲法の根幹にかかわる重大問題として残っている」とし、暴走安倍政権のもとで「教育再生」提言の形で

さらに改悪を推し進めようとしている実態を説明しました。

「日本と違い1学級が小学校25人、中学校で18〜19人と少人数教育、絶対に落ちこぼれを作らない」として、特別補助授業をする小さな教室もある。教員は教

育以外の仕事はゼロ。読解力は国を上げて力を入れ、ヘルシンキ56万人の人口に38ヶ所の図書館がある。

フィンランドの教科書は『考えるための教科書』であり、教育は『自身で考え判断できる主権者を育てる』政策がいきとどいていきました。

向上」を理由とした首長・教育委員会事務局による教育内容の強制が日常化した。この他にも「主幹教諭、指導教諭」など先生の中に職階制を導入などで統制する機能を強める狙い

「学力向上」を理由とした首長・教育委員会事務局による教育内容の強制が日常化した。この他にも「主幹教諭、指導教諭」など先生の中に職階制を導入などで統制する機能を強める狙い

### 楽しく元気に 新婦人まつり開催

9 月 21 日 (日)、はまなす会館で開かれた「新婦人まつり」は、昭和 56 年の新鉱災害への全国支援活動に始まりました。

あの時の悲しいままでに美しい紅葉に団結の紅色を重ねて『もみじ祭り』と名付けたそうです。

その後、『新婦人まつり』と名を変えて今に続いています。

久世支部長の開会あいさつに続いて、労連議長・筒井勇治さんのあいさつの後、プログラムが幕を開きました。パン食い競争、カード合わせ等軽く汗を流して昼食。チャリティーバザーで東北支援も忘れない「新婦人まつり」でした。



### 夕張・初のたたかい ② 坑夫騒動 (その 1)

夕張初の災害が起きた 1892 年 (明治 25 年) の 12 月、一つの事件が起きました。

正月を控え年末ぎりぎりになって、飯場 (坑の雇い主) の一つ「奈良飯場」の坑夫数名が夕張炭山採炭所 (のちの鉱業所) に出頭し、「賃上げと米・味噌の貸与願い」を申し出たことが発端になったのです。

これが夕張での初のたたかいと記録されています。その要求には「賃金引き上げ」がちゃんとかがげられているのです。働く者の基本的要求である「賃上げ」が、この時期早くも掲げられたことは注目には値するでしょう。

### せめて正月くらいは人並みに

正月を前に、すでに貸与されていた米・味噌は、市街地で正月用の餅や酒に変わっていました。その日暮らしの飯場生活の坑夫たちや家族にとって「せめて正月くらいは人並みに」の思いです。

年が明けて 1 月の 3 日、坑内関係の 7 つの飯場坑夫たちは、青木毛一を代表に再び採炭所の所長石橋政信の社宅に向かい直接回答を迫ります。

石橋所長は「米については 5・6・7 日の三分分として一人 5 升を貸与する。明朝 8 時に願いを出すように。(280 人が申し出る)。賃上げについては、北炭全体の問題なので即答はできない。明日札幌本社と協議し 3 日以内に回答する」これが所長の範囲ぎりぎりだとし、4 日に札幌に出張してしまう。

ここで、米味噌の要求だけは満たされたようだが、なにかもやもやしたものを残したまま、坑夫たちは……

(つづく)



はたやま 和也「かけある記」  
日本共産党  
北海道委員会書記長

### はたやま 和也

### 引き継がれる思い

うれしい知らせが届きました。東京・墨田区議候補として発表された、浅野清美さんは北海道出身。亡くなられたお父さんは八年前、職場の不当に負けじと労働組合をつくり、間もなく日本共産党に入党。争議が解決した後は国会議員団事務所で働き、選挙では候補力も運動してくれました。いっしょに全道をまわった仲間でした。

二人で出張先でお酒を飲む時に、いつも浅野さんは清美さんのことを話していました。争議のときも選挙のときも、支えてくれた家族には感謝の気持ちでいっぱいだと何度も聞きました。涙もろい方でもありました。

お母さんに続き、そのお父さんが亡くなられた後、清美さんが事務所に「共産党に入りました」と電話をくれました。東京に引越され、かかってきた電話では「こんどは候補になりました」。清美さんは飄々(ひょうひょう)としていたようですが、聞いた私たちはビックリ！ お父さんは、私たちの何百倍もビックリしているのではないのでしょうか。

お父さんは「人間が大切にされる社会でないとダメだ。だから私は共産党に入ったんです」と話していました。清美さんは今、何を語っているのでしょうか。

臨時国会が始まりました。「人間らしい社会を」と若者が立ち上がり、「昔のあの時代に戻すものか」と戦争体験者が立ち上がっています。各地で候補も決まってきました。どんどん安倍政権を追い込みましょう。来年の地方選で審判を！と、私も燃えています。